

制御しえぬ魔物出現とも言うべき異常事態が重慶で出来している。中国で開催中のサッカーアジアカップで日本チームは、準決勝戦（3日、対バーレーン戦、）で中国人観客の凄まじいブーイングの中、辛うじて勝利、決勝戦に進出することとなった。そして、来る7日には中国と決勝戦で激突する事となった。

日本戦では、中国人観客からの激しいブーイングが浴びせられ、次第にそれがエスカレートしているようだ。日本人サポーターにも物が投げつけられたり（24日、対タイ戦）、警備員に警備された状態で応援せざるを得ない状況（31日、対ヨルダン戦）に追い込まれ、日本の国家演奏の時に起立しない、ブーイングや鉦太鼓を打ち鳴らしての妨害行為など国際慣例に悖る行為をする中国人観客が多く（24日、28日の対イラン戦）、「釣魚島（日本の正式名では、尖閣諸島）を返せ」などの横断幕を掲げるなど政治ショウの様相を呈した。一部では、青いユニフォームを来た日本人サポーターが多数の地元ファンに取り囲まれ、警備当局に保護され（31日）など由々しき事態が起きている。

あろうことかジーコジャパンの練習まで意図的か否かは定かではないとはいえ、露骨に妨害された。

流石に、29日付の中国青年報は、「こうした『愛国』は誰も喝采しない。日本が出場を取りやめたらアジアサッカー史上、最大の醜聞だ」との異例の記事を掲載したが、沈静化する気配は毛頭感じられない。反って、火に油を注いだみたいなものだ。反日の行為が目を追う毎に強まってきているようだ。冷静を呼びかけつつも誰かが煽っているか、見て見ぬふりをしているに違いない。穿ち過ぎる見方か。

かかる事態に、政府・自民党内には中国政府に抗議すべきだとの声が燎原の火の如く広がりつつあり、4日政府は中国に「平静な対応」を申し入れた。何とも恐る恐る止めて下さいとお願いしたみたいに聞こえるのは小生のみか。勿論、徒に対立を煽る積もりは毛頭ないけれども、そもそも日本側に何らの非がないのは自明である。それを毅然と抗議するのではなく、お願い調と言うのは如何なものか。

確かに、日本と中国の間には、歴史認識の問題、小泉首相の靖国神社参拝に関する事案、尖閣諸島の帰属に関する問題、排他的経済水域への中国船舶の調査や天然ガス採掘施設の建設等とそれに対する日本の抗議の海洋権益に関する摩擦、旧日本軍の遺棄化学兵器による事故、日本人の集団売春事件、そして1次リーグ3戦とヨルダン戦の会場であった重慶は先の戦争において日本軍が無差別爆撃をした地であり、元々反日感情が強いと言う事もあるのだろう。ネット上では、反日行動を呼びかける書き込みが急増しているようだ。

本来、スポーツの世界に政治的な色彩を持ち込むべきではない筈だ。スポーツ競技者には勿論、スポーツを観戦する者にもそれなりのマナーが要求され、それがスポーツのスポーツたる所以であった筈だ。とはいえ、この様な奇麗事だけで収まる話ではなく、現実には政治的な道具としてスポーツが利用されてこなかったとは言い切れなくても、今回の場合は余りにもひどすぎる。礼を失っているばかりではなく、選手やサポーターの身の危険をも危惧される。2008年の北京オリンピックを開催する資格があるのだろうか。疑問

である。

中国の反日教育の徹底振りに吃驚させられる。また、中国は求心力を回復する為に江沢民時代に愛国教育を強化・加速させたが、それは即ち反日教育そのものである。中国国内の矛盾から国民の目を他に転じる為の手段としての愛国主義の強調だったのだろう。その意図は充分すぎるほどに達成された。否、その愛国心・反日感情の高揚は中国政府の予想を遥かに越えて大きくなってしまったようだ。育ち過ぎた魔物に等しい。既に中国政府としてその魔物を制御する事は不可能となってしまった感がある。どうする存念だろうか。天安門事件の時のように徹底的な弾圧策をとるのだろうか。それ以外に鎮静策は無いようにも感じられる。

何とかしないと、悪感情や対立心が、益々エスカレートし、抜き差しならぬ所まで行ってしまい、日中双方に思わぬ事態を招かないとも限らない。不測の事態を惹起させない為にも中国政府に早急な対策・措置を切に望むものである。勿論、日本側としても徒に対立を煽る積もりはないが、言うべきは言う事が必要である。世論に押される形でしか動かない政府や所管官庁では困る。

今月 7 日の日中のアジアカップ杯決勝戦は一体どうなるのか。日本が優勝しようものなら焼き討ちも起きかねない？空恐ろしき哉。

(参考;各種ニュース記事)